

が多かった。DC後は全例NaチャンネルブロッカーでAf再発予防を試みたが、85%でAf再発を認め、再発までの期間は全例2週間以内であった。ペプリコール使用例は、33%が除細動に成功し、22%に副作用を認めた。

5 French guiding catheter を用いたインターベンションの試み

(東京都老人医療センター)

藤田直也・久保良一・佐藤加代子

〔目的〕less invasive coronary interventionをめざして当院では1999年12月より、5 French guiding catheterを用いたintervention (5F intervention)を試行開始した。しかしその有用性、欠点については不明な点が多い。したがって、5F interventionの有用性、問題点を検討する。

〔方法〕5F interventionをfirst choiceとして行い、その際5F interventionが不相当と判断された場合、6F interventionに変更することとした。この試行期間において6F intervention施行(変更)例を検討することにより、5F intervention導入の功罪を検討する。

〔結果〕5F intervention導入後2カ月間に施行した全症例は50例(狭心症28例、急性心筋梗塞22例)。年齢は73±10歳(女性56%)。29例(58%)に5F intervention(すべてmonorail system使用)を施行し、そのうち、経橈骨動脈アプローチ(TRI)が72%を占めていた。成功率は5F intervention例100%、6F intervention例81%(失敗例はすべて慢性完全閉塞病変例)。造影剤の使用量は有意に5F intervention施行例のほうが少なかった。穿刺部の出血性合併症の頻度に有意差はなかった。6F interventionを選択した21例(42%)の内訳は急性心筋梗塞10例、慢性完全閉塞病変例7例、cutting balloon1例、冠動脈内エコー1例、鎖骨下動脈の高度屈曲のため5F TRIから6F大腿動脈アプローチへの変更例2例。なお、guiding catheterのサポート不良による5F interventionから6F interventionへの変更をきたした症例はなかった。

〔総括〕5F interventionをfirst choiceとして導入しても、急性心筋梗塞症例等の緊急例、慢性完全閉塞病変症例には6F interventionを選択する傾向が認められた。今後経験の蓄積で急性心筋梗塞症例等の緊急例に施行する頻度は増加する可能性はあるが、完全に5F interventionのシステムにするにはdeviceの制約などの問題があり、症例の選択が重要と思われた。

当院におけるBrugada症候群発見に対する取り組み

みについて

(都立荏原病院内科)

仁禮 隆・

山田智広・池上晴彦・日吉康長

〔目的〕当院では循環器内科医が全科の心電図を判読し、Brugada様心電図には精査を勧めている。今回その成果について報告する。

〔方法〕対象は、1997年1月から1999年12月までに当院検査室にて心電図を記録した27,877例、男性13,989例、女性13,888例、年齢0~104歳、平均61±19歳である。前胸部誘導心電図でr'波+ST上昇を認めた例に対して循環器内科外来受診を勧めた。診療後Brugada症候群が疑われる症例に対して入院精査を施行した。

〔結果〕Brugada様心電図は59例(0.21%)に認められた。男性では20~80歳代で0.3~0.8%に認められたのに対して、女性では40~70歳代に0.1%のみであった。循環器内科受診は30例(0.1%)であった。3例でBrugada症候群が疑われ入院精査を行い、2例でBrugada症候群と診断された。

〔結語〕診断された2例は当科でアプローチしなければ見逃されていたケースであり、他科心電図に対する積極的な取り組みが必要と考えられた。

高齢ACS患者の特徴

(西新井病院循環器センター)

松本延介・志村由美・田中博之・

三井幾東・河合 靖

(埼玉県立循環器呼吸器病センター)

齊藤克己

国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、人口は高齢化の一途をたどり、65歳以上の総人口に占める割合は平成62年に32.3%に達するという。今後は重症循環器疾患を扱うCCUにおいても高齢者の相対的収容比率が上昇することが予想される。このような状況のもとで、限られた病床や機材、人員を有効に活用するために、高齢CCU収容患者の特徴を把握することは有意義であると考えられる。今回、1998年1年間に当院CCUにACSで収容された66例を、75歳以上の高齢者群と75歳未満の非高齢者群の2群に分け、その特徴を疾患および社会的側面から検討したので報告する。

創傷治癒の遷延を認めたプラスミノゲン欠乏症の1例

(青山病院成人医学センター)

島本 健・水野弘美・楠元雅子